

作 小泉 八雲  
イラスト 加藤 オズワルド

昔、武蔵むさしの国のある村に、茂作もさくとみの吉きちという、

二人のりょうしが住んでいた。

ある年の冬、茂作とみの吉は、いつものように山へりょうしに出かけた。

ところが、どうしたとか、その日にかぎって

え物がとれない。

茂作「…ん？」

(ゴオオオオ)

と、とつぜんあたりが急に暗くなり、ゴオオオと山が鳴り  
みるみるうちにはげしい雪がふり始めた。



茂作もたく「みの吉きち〜！」

みの吉「茂作じいさ〜ん！」

吹雪ふぶきで真っ白になり、前も後ろも見えない。

その中を二人は、はうように山小屋へたどり着いた。

茂作「今夜は、ここにとまるべ。」

みの吉「そうすべ。」



茂作もくとみの吉は、いろりに火をつけ、みのにくるま  
つて横になった。年よりの茂作は、すぐにいびきを  
かき始めた。しかし、まだわかいみの吉は、外の吹雪ふぶき  
のおそろしい風の音が気になって、なかなか寝つな  
かった。

(ゴオオオオ〜)

どれほどたつたろう。

みの吉「はっ…!」

ぞくつとするような寒さにおそわれ、みの吉は目を  
さました。



そこには、白しろうぞくのわかいむすめが立っていた。

みの吉きち（だれだ！）

みの吉は、さけぼうとしたが声が出ない。起き上ろうとしても、なぜか指一本動かすことができない。



むすめは、ねむっている茂作の上にかがみこむと、

**雪女**「ふうっ」

と、白くこおった息をふきかけた。

**みの吉**<sup>きち</sup>（やめろっ！）

すると、むすめは、音もなくこちらに近づいてきた。

みの吉の上にかがみこむと、顔を近づけてくる。

その目はぞっとするほど黒く、おそろしい。しかし、

すき通るような、白い顔はこの世のものとは思えない

ほど美しかった。



雪女「わたしはお前が気に入った。だから今は、命は取らないことにする。」

だが、今、見たことを決して人に言ってはならない。もし言ったときには、お前の命はないと思え。やくそくしたぞ…。」

みの吉きち「…はっ、じいさん！ 茂作しげじいさん！」

すでに茂作は、ごおりついたように息たえていた。



そうして一年がたった、やっぱり吹雪ふぶきの夜のことだった。

(トントントン)

みの吉きちは、

みの吉きち「いま時分じぶん、だれだべ…。」

と、戸を開けると、なんとも美しいむすめが一人しよんぼりと立っていた。

お雪「旅の者ですが、道にまよってなんぎしております。

今ばん一ばんとめてもらえませんか。」

みの吉「そうか。そらこまったことだな。」

みの吉は見るに見かねて中へ入れてやった。





むすめはお雪という名で、身よりもないという。  
みの吉は、このお雪に、知らず知らず心ひかれていっ  
た。  
それから雪は、七日の間ふりつづいた。そうこうする  
うちに、お雪は村に住みつき、みの吉のよめさんにな  
った。

お雪は、美しいだけでなく、よくはたらくいいよめ  
さんだった。

二人の間には、つぎつぎ子どもも生まれ、幸せな日  
がつづいた。

ただひとつ、ふしぎなことは、お雪はお天道様がきら  
いで、昼間は決して外へ出ないことだった。



こうして何年かたった、ある冬のこと。この日もや  
つぱり吹雪ふぶきの夜だった。

みの吉きちは、お雪の横顔を見るうちに、ふと、茂作もさくじい  
さんがなくなった、あの日のことがうかんできた。

みの吉「思い出すですよ、あのばんのことを。」

お雪「あのばんのこと…。」

みの吉「茂作じいさんが死んだばんのことだ。」

あのばんも、今日みたいな吹雪だった…。」

みの吉は、あの夜のことをはじめて口にした。

しかし、いっぺん話し始めると、止まらなく

なって、何もかもお雪に話してしまった。



みの吉きち「だども、ふしぎなこともあるもんだ。  
お前は、あのばんの女にようにとる。あの、  
おそろしい黒い目、まっ白い顔……。あれは、  
もしかしたら、おら、雪女ではねえかとな……。」  
みの吉が、そこまで言ったときだった。

(ビュウウウ〜!!)

雪女「とうとう、言ってしまったな。



決して言うてはならないとやくそくしたのに、  
お前はやくそくをやぶったな。」

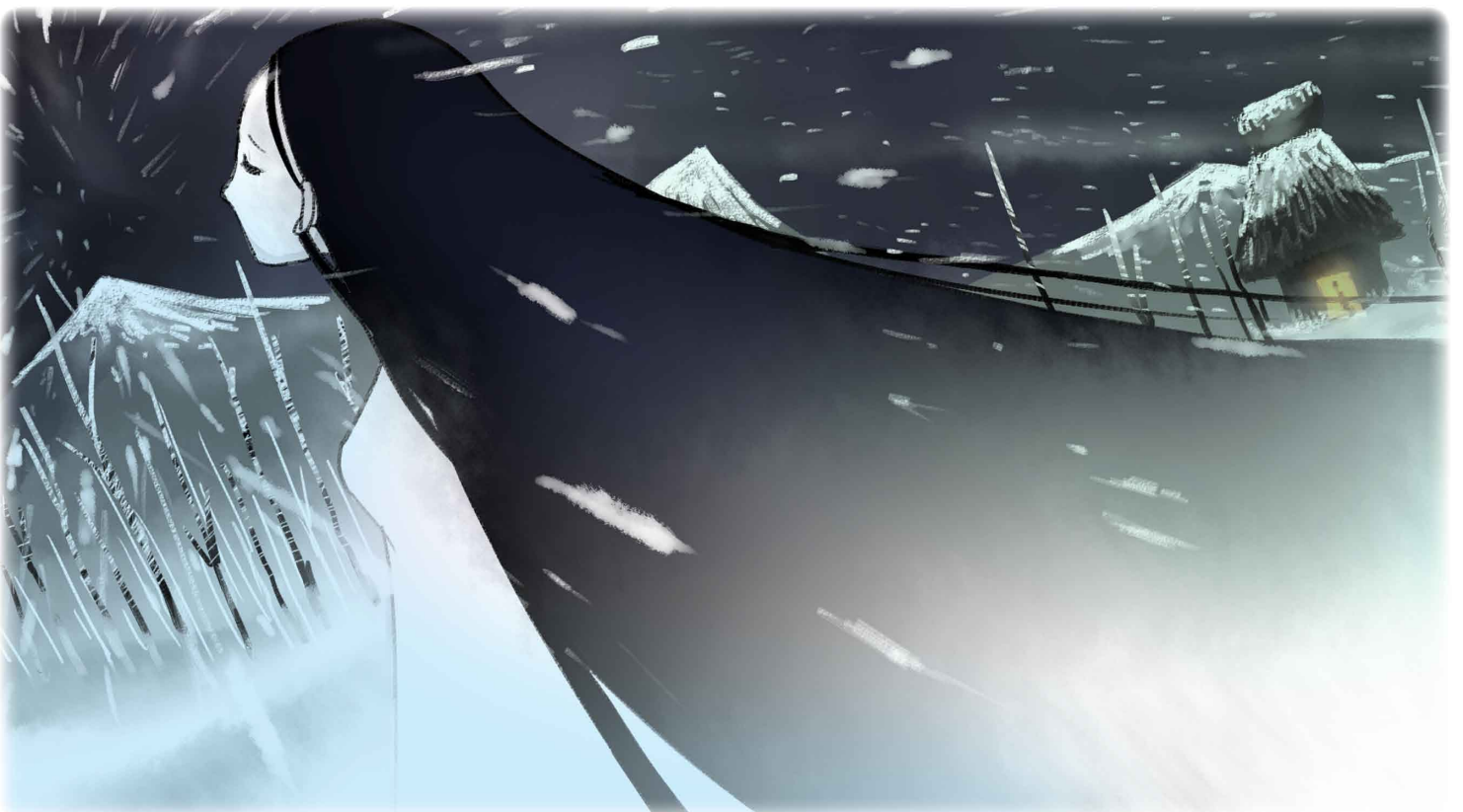
みの吉きち「お、お雪…。」

雪女「そうだ、お前が言うとおりに、わたしは雪女だ。  
命をもらうやくそくだが、子どもらがふびんだから、  
命だけは助けてやる。」

これで、わたしたちはおわかれだ…。」

みの吉「お雪…。」

雪女のすがたは、あとかたもなく消えてしまった。  
そして、二度とそのすがたを見た者はいなかった  
という。



おわり